

### 43. Acacia のちかまき試験

林試宮崎分場 染 郷 正 孝  
川 添 強  
竹 下 慶 子

#### I まえがき

南九州地方は温暖な気候であることから、Acacia 属の生育に適した条件と考えられる。ここでは、林地での A.mollissima ほかに 3 種のちかまき試験を実施し、まきつけ法を 2~3 検討したので報告する。

#### II 材料および方法

##### 1、ちかまきに供した種類

(1) A.mollissima (2) A.dealbata (3) A.decurrens  
(4) A.baileyana 計 4 種

##### 2、試験方法

i 時期および場所 林試宮崎分場構内、面積 1 種につき 0.05ha 昭和38年2月~9月

##### ii ちかまき方法

ちかまき間隔を 2 x 2 m (ha 当 2,500 本) とし、径 40cm、深さ 60cm の耕耘をおこない、クラを作った。4月下旬(晩霜をさける)クラの中央を径30cm、深さ10cm 堀おこし、底部に堆肥(約100g)を入れ、間土をおき、さらに複合肥料(加磷硝安緑1号約100g)を入れた。その上に土を7~8分目盛り、タネ(熱湯処理 80°C 5分)を5~10粒あて径15cmの範囲にまき、土を厚さ5mm程度かぶせ、焼モミガラをうすくまいた。草を防ぐことと、地温を高める目的で保育紙をかぶせた。これらの組合せで、つぎの試験区を設けた。

- A 耕耘区(対照)
- B 耕耘+肥料区(堆肥および複合肥料)
- C 耕耘+保育紙区(黒ビニール x 7.5cm)
- D 耕耘+肥料+保育紙区

1種につき列状2回繰返し

##### iii 調査方法および管理

発芽状況を調べ、稚樹高を毎月1回測定した。

(1種につき計120本)、虫害防除のためBHC3回撤布(6、7、8月)

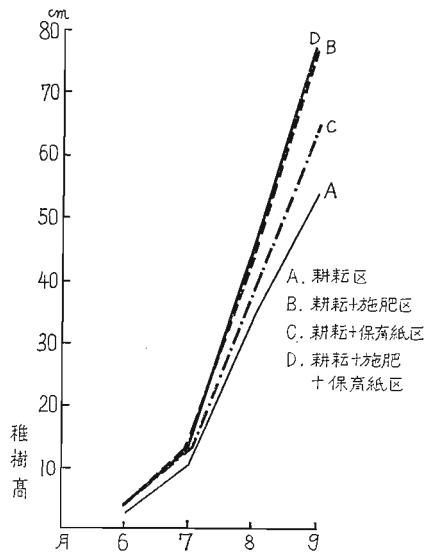
#### III 結果および考察

##### 1、施肥および保育紙の成育におよぼす影響

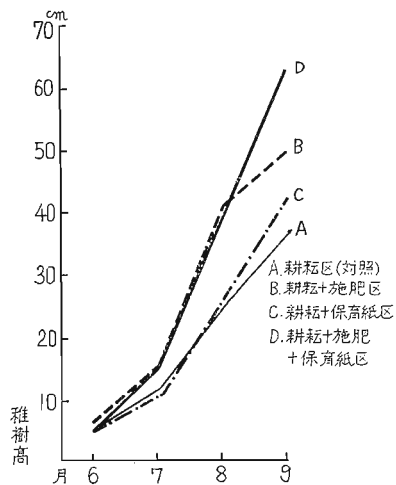
発芽後の生育状況を1カ月毎に調べ、耕耘区を対

照とし、施肥および保育紙の効果は第1~2図に示すとおりである。A.mollissima の9月における稚樹の高さは、耕耘区(対照)平均53.6cmであり、耕耘+

第1図 A.mollissima のちかまき造林における処理別生育比較



第2図 A.dealbata のちかまき造林における処理別生育比較

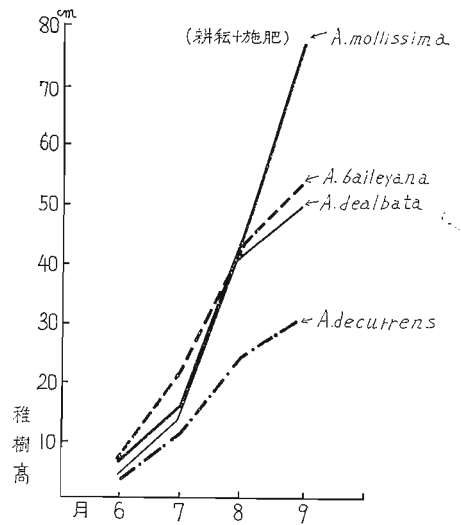


施肥区77.0cmで最大を示し、ついで耕耘+施肥+保育紙区 66.8cm、耕耘+保育紙区 64.3cm の順で、生育に差異を示した。A.dealbata は、耕耘区（対照）平均 36.8cm に比し、耕耘+施肥+保育紙区は、62.5cm で最大を示し、ついで耕耘+施肥区54.2cm、耕耘+保育紙区42.1cm の順で生育は良好であった。以上2種とも施肥の効果は極めて大であり、保育紙を併用することによって、さらに生育は促進される作用が明らかに認められた。月別にみた稚樹の伸長度は、2種とも7～8月にかけて最大伸長期を示した。この時期は、各処理の効果が顕著にみられ、A. mollissima の場合耕耘区（対照）ではこの1カ月に伸長した値は、21cmであった。これに比し、耕耘+施肥区では30.5cmを示し、前者より約45%増となっている。また、A.dealbata では、耕耘（対照）12.8cm に比し耕耘+施肥+保育紙区は23.4cm で、約82%増の成長量を示した。9月に入ると伸長は低下してくるが、保育紙を使用した区ではA. mollissima を除く A.dealbata, A.decurrens, A.baileyana の3種において、生育の低下がさほどみられなかった。このことは雑草を防ぐ効果のほか秋期において地温を保ち、生育を促す効果を示しているものと考えられる。

## 2、種別にみた生育状況

耕耘と施肥をおこなった区で種類別の成長を比較すると、(第3図)9月におけるまきつけ後4カ月目の稚樹の高さは、A. mollissima で平均 77.0cmを示し最大であった。ついで A.baileyana 54.3cm、A.dealbata 54.2cmであり A.decurrens は31.7cmで最も生育は不良であった。なお A. mollissima は病虫害に対する対

第3図 Acacia のちかまき造林における種別生育比較



抗性も強く成林の可能性が高い。

## IV むすび

Acacia のちかまき造林をおこなうには、初期の生育がその後の成林に大きく影響するものと考えられる。したがって、耕耘はもとより適量の施肥と、保育紙の併用は、極めて効果のあることが解った。また、温暖な地方では、6～8月に虫害の著しい被害がみられ、成長期とも重なることから、防除法の検討が必要である。また、すまき状に成林させること、および越冬の方法については、今後の課題と考えている。